

魚がおぼれる話

井上 澄夫（事務局）

「河童の川流れ」という言葉がある。辞書によれば、どんな名人でも、時には失敗することがあるものだという意味である。

そういうことはありえると人は思うだろうが、「魚がおぼれる」といえばそんなアホなと思う人がほとんどだろう。魚は水中で生きるものだからである。しかし魚もおぼれるのだ。

私は持病の療養のため、足かけ2年ほど奄美諸島の沖永良部（おきのえらぶ）島南部の知名（ちな）町で暮らしたことがある。そのとき、魚がおぼれることを知った。

沖永良部は台風の通り道である。毎年、フィリピン沖あたりで発生する出来立てホヤホヤの台風が絶海の孤島である島を直撃する。

気象庁が命名した「沖永良部台風」を覚えている人は多いだろう。1977年9月9日に同島を襲った台風で、島の測候所の見積もりでは最大瞬間風速は80メートルに達した。見積もりではというのは風速計の針がぶっ飛んだからである。私は島に滞在中、「竜巻に巻き込まれてあそこの婆さんは家ごと〇〇まで運ばれた」とか、鉄筋コンクリート造りの頑丈な家でも横殴りの強風のせいで「住んでいる人を乗せたまま畳が天井近くまで浮いた」というような話をよく聞いた。台風襲来時に撮った防波堤を越える波の写真が残っているが、波は上り龍のように空中に躍り上がっている。先の体験談はあながち誇張とは思えない。

そんなことが起きるのだから、島の人は風速30メートル程度には慣れていて大騒ぎし

ない。潮気を含む海からの強風による塩害で電柱のトランスが火を吹き（これは私も目撃した）、停電すると、島の男の多くが浜辺のビアガーデンの屋上に集まって、目の前で盛り上がり過ぎては寄せる波のうねりを肴（さかな）に一杯やるほどだ。もっとも停電になると、役場も郵便局も学校もすべて機能を停止するからそうするしかないのだが。

さて台風一過の早朝、それもまだ暗いうち、島のおばあさんたちが猛烈に元気になる。孫たちを叩き起こし、バケツを持たせて浜辺に急ぐ。島の海岸の多くがリーフ（珊瑚礁）に囲まれているが、リーフの端の陸上には熱帯性常緑低木で潮風に強いアダン（タコノキ科）が生い茂っている。おばあさんと子どもたちはそこに急ぐのだ。

なぜか。アダンの林にアオブダイなどの大きな魚がボテボテ落ちているからだ。漁や釣りなどせずにけっこうなご馳走を拾えるのだが、それらの魚は台風による高い波にさらわれて浜に打ち上げられるのだ。

深海魚はそうでないかもしれないが、とりわけ海水面近くを群れて回遊するアジやボラなどは高波にさらわれるとおぼれてしまう。だから台風が近づくとそれらの魚は避難所を求めて港に入ってくる。台風が接近中だからいささか危険な話だが、そういうとき港で釣りをするとと思わぬ大漁になることがある。

あるとき知名港でそんなことを知らずに釣り糸をたらして、20センチ級のヒラアジを40匹以上入れ食いで釣り上げたことが

ある。台風をやり過ごすため自分の船を台車に乗せ車で引っ張って港のスロープに陸揚げしたばかりの漁師が私のそばにやってきて、「どれどれ」とか言いながら釣れたヒラアジを入れた網を引き揚げてみて「ほうー」とあきれていた。

ボラも群れる魚だから同様に大漁になったことがある。ボラは悪食（あくじき）で臭いと思われていて一般にあまり評判が芳しくないが、産業排水や家庭排水が少ない永良部のボラは臭みもなく実にうまい。洗（あら）いにして食べてもらおうと魚名を当てられる人はまずいない。タイの刺身に似ているのである。

さて、吊り上げたボラを入れた網を背にかつぎ、えんやえんやと私の棲家である小屋に

運んでいたら、となりのマツおばが目ざとくそれを見つけ、それから火事場の騒ぎになった。マツおばが隣近所に声をかけて集めた高齢者たちが競うようにボラを買い求めたのだ。かなり型のいいボラが一匹100円であっという間に売れた……。

魚も台風がこわいのだ。台風の接近を本能的に察知して港に避難してくる。考えてみれば、人間も台風が来れば風雨を避けるため頑丈な建物に避難する。それと同じだろう。

ジュゴンもおそらくは自分の避難場所を心得ているだろうが、水面で呼吸しなければならないから、20分に一度は海底から浮上しなければならない。台風襲来ของときはどうしているのだろうか。ちょっと気になる。



雲湧く大浦湾（2011年6月15日）

夏雲が湧く海にのんびり。最高です。海に潜ればそこは生き物の世界。

© 山本 英夫